

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 9 月 14 日

所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	石塚真太郎

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本女子大学
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園を科学する～動物園のもう一つの楽しみ方～
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 9 月 12 日 (1 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
日本女子大学
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>2015年9月12日、日本動物心理学会後に開催された公開シンポジウム「動物園を科学する～動物園のもう一つの楽しみ方～」に参加した。私はPWSプログラムの出口として動物園のキュレーターを希望しており、そのうえで役に立つ講演を聞けるのではないかと期待して参加した。</p> <p>シンポジウムでは14:00-16:30の間に村田浩一氏、中道正之氏、田中正之氏、加藤由子氏の四方が講演された。四方の立場はそれぞれ異なり、それぞれの視点から動物園について語られ、勉強になった。</p> <p>村田氏の講演では、動物園の歴史から目的まで基礎的な話が聞けた。動物園の副次的な目的として、地域振興、動物福祉、防災があることや、動物園学とは動物園の運営に関わるあらゆる学問と定義されることがあるということは知らなかった。特に「動物園学」という言葉はよく耳にするが、考えてみれば曖昧な言葉のように思う。今後みんなで動物園のことを考えていくとき、動物園学という言葉の意味を全員で一致してものにしていく必要があると感じた。また、村田氏が園長であるズーラシアは遺伝学や内分泌学の実験ができる実験室があるそうだ。ここで気になったのは、これらの実験室は十分に使われているのかということだった。機会がなく質問することができなかったが、いつか尋ねてみたい。</p> <p>中道氏の講演は、自身の動物園での母子間関係の研究の紹介が多かった。結果はわかりやすくかつ視聴者の関心を引き付けており、プレゼンテーションとして参考になった。中道氏の行っているような動物園での行動研究を一般の人々に伝えていくことで、より動物園の動物の行動に興味をもつ人は増えていくと思う。一方で動物の行動の研究として、なぜ野生ではなく飼育下で行うかが聞ければよりよかったと感じた。</p> <p>田中氏の講演は、動物園での認知学研究の話が中心であった。田中氏は京都市動物園のゾウで認知実験を行うという希望を持っているとのことだった。霊長類以外の動物でも認知実験を行うことは、動物の認知研究を進めるのみならず、動物園のレクリエーションの場としての機能を高めると思う。動物園に来園する人はそれぞれお気に入りの動物は異なるだろうし、いずれかの種が実験課題に取り組んでいるのを見れば、お気に入りの種ではどれだけできるのかと興味を持つのではないだろうか。このような実験を危険動物で行うのは簡単ではないとしても、可能な種から広げていくことができれば素晴らしいと思う。ただし、もちろん動物をただの見せ物にしてしまうことには気を付けないといけない。</p> <p>加藤氏は講演の中で、各動物園の情報共有サイトを開設することを提案されていた。いつ、どこの動物園に行けば、それぞれの種について、特定の行動を見ることが出来るかを知れる情報サイトだ。確かに画期的なアイデアだと感じたが、個人的には問題点も大きいのではないかと思った。動物がサイト通りにピンポイントで行動を見せてくれるとも限らないだろうし、その行動が見られない場合、サイトを見て来た人々を落胆させることも起きてしまうだろう。また仮にその行動を見ることができたとしても、そのようにしてたまたま観察できた行動は教育の目的の上で意味があるのか疑問だ。それに本当に興味がある人なら、そのようなサイトなくても自分で調べてくるだろう。動物についての教育のためには、外からの情報に頼らず、まずはじっくりと観察してみる事が大切だと思う。</p> <p>このシンポジウムを終え、紹介される動物園での研究は行動学、認知学に偏っているように感じた。しかし、動物園は遺伝学、内分泌学の素材の宝庫でもあり、これらの研究にもっと焦点が当てられるべきだと思う。今後、動物園付属の研究施設や、そこでの研究員を増やしていく必要があるだろう。また、動物園での研究もすべての動物園で認知実験や行動観察だけを推し進めるよりも、園によって重点的に強化する研究分野を分けていくのがよいと思う。私は大学院での研究において野生ボノボのゲノムを解析する予定だが、将来動物園に関わることができたら、多くの人々にとってはややとっつきにくい動物のゲノムの話に来園者に教育していけるようになりたい。</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

The 75th Annual Meeting of the Japanese Society for Animal Psychology
Hosted by Japan Women's University
公開シンポジウム
動物園を科学する
～動物園のもう一つの楽しみ方～
2015年9月12日(土) 午後2時00分～4時30分
日本女子大学 目白キャンパス 桜楓2号館 4階ホール

動物園は、欧米ではZOOLOGICAL GARDENといわれる施設です。すなわち、動物学の研究所としての役割を担ってきました。日本では、東京の上野動物園が1882年に開園しましたが、当初の役割としては娯楽展示と教育でした。2008年京都大学に野生動物研究センターが設置され、京都市立動物園と連携協定が結ばれました。日本で初めて動物園と大学の教育研究連携となったのです。一方、日本大学生物資源学部動物資源学科に動物園学の教授として迎えられた村田浩一氏は2011年横浜市の横浜ズーラシアの園長に就任されました。今回、動物園の動物たちを科学的に研究している方々をお招きし、ちょっと違った動物園の楽しみ方を提案していただきます。動物研究家には動物園はこうあってほしい、このように見たらさらに楽しめるという方向性を提示してもらい、シンポジウム参加者が動物園に行ってみたくなる内容にしたいと思っております。さらに、このシンポジウムが動物園における心理・行動研究のあり方を探る一助となれば企画者としてうれしかぎりです。

プレゼンター

動物園学～動物園を支えるサイエンス～
**村田 浩一**
日本大学生物資源科学部教授
よこはま動物園ズーラシア園長

動物園で学ぶ野生動物の子育て
～キリン、クロサイ、そしてサルの母と子～
**中道 正之**
大阪大学大学院
人間科学研究科長・教授

動物園の動物のころを探る
**田中正之**
京都市動物園
生き物・学び・研究センター研究員

コメンテーター
動物園利用者の視点から
**加藤 由子**
動物ライター

 **日本女子大学**
JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY

日本女子大学人間社会学部 学術交流研究事業
共催：日本動物心理学会/日本女子大学心理学科/心理学科の会
Home Page : <http://square.umin.ac.jp/doushin75/index.html> mail : doushin2015@yahoo.co.jp

シンポジウムのポスター

6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS リーディング大学院プログラムの支援を受けて遂行できました。PWS プログラムに感謝申し上げます。